

【小学校学習指導要領】

1 「第1 教育課程編成の一般方針」

(1) 道徳教育と道徳の授業の関係

学校における道徳教育は、特別の教科である道徳（以下「道徳科」という）を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。

(2) 道徳教育の目標

道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする。

(3) 道徳教育を進めるための留意事項

人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的生活の中に生かし、豊かな心をもち、伝統と文化を尊重し、それらを育ててきたわが国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、平和で民主的な国家及び社会の形成者として、公共の精神を尊び、社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し、未来を拓く主体性のある日本人の育成に資することとなるように特に留意しなければならない。

2 内容の取扱いに関する共通事項 抜粋

児童の発達段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図ること。その際、各学年を通じて、自立心や自律性、生命を尊重する心や他者を思いやる心育てることに留意すること。

●第1学年及び第2学年

挨拶などの基本的な生活習慣を身に付けること、善悪を判断し、してはならないことをしないこと。社会生活上のきまりを守ること。

●第3学年及び第4学年

善悪を判断し、正しいと判断したことを行うこと、身近な人々と協力し助け合うこと、集団や社会の決まりを守ること。

●第5学年及び第6学年

相手の考え方や立場を理解して支え合うこと、法やきまりの意義を理解して進んで守ること、集団生活の充実に努めること、伝統と文化を尊重し、それらを育ててきたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重すること。

3 道徳の時間の目標

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

※中学校学習指導要領では、「物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方について考えを深める学習」とされている。

4 子どもの生き方を深める

※学習指導要領における記述

・道徳の時間

自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う。

・総合的な学習の時間

自己の生き方について考える事ができるようにする。

・特別活動

人間としての生き方についての考えを深め自己を生かす能力を養う。

☆ 道徳・特別活動は「追求」で、総合的な学習は「追究」

☆ 特別活動と総合的な学習は「直接体験」に重きをおき、道徳は「間接体験（心の体験）」に重きをおく。

道徳科の目標に、「実践意欲と態度」が加えられたことで、情的側面だけでなく、道徳的な問題を自ら思考し主体的に判断し、議論するような応用的な認知的側面、行動的側面の指導にも力を注ぐ授業へと見直しが求められています。

I 道徳の授業はどのように行ったらよいのか

道徳の授業は、何をやったらいいのでしょうか。ある程度年をとると面と向かって聞けないものですが、若い先生からは意外によく出る質問です。

道徳の目的、分かっているようでも何かはつきりとしなない。やらなくてもテストもないし、心配して親から電話がかかってくるわけでもないし、授業を振り替えたとしても子供が怒るわけでもないで、ついつい「まあいいか」となっていますか。でも3年後には教科としてスタートします。評価もしなければなりません。

「授業なんかやらなくたって、毎日道徳をやっている」と豪語する方、もうそうは間屋がおろさなくなります。どうせやらなければならないのなら、楽しく、先生ご自身が効果を実感できる道徳の授業をやりたいものです。

先生方が、一方的に話をして、価値観を押し付けるだけで子供の道徳性は育ちません。「いじめはだめだ」「協力が大切だ」と毎日唱えることで状況が改善しないことは先生方が一番よく知っていると思います。子供を見て、「何でもう少し考えた行動ができないのか」と思うことがあるでしょう。1週間に一度、自分自身をじっくりと振り返らせる機会を持ち、子供同士で道徳的な価値について話し合わせることで、子供は確実に変わります。実際に、荒れまくったK中で担任としてきちんと道徳の授業をやったら、年度後半で子供は加速度的に変わりました。「毎週、当たり前のように道徳と特活の授業が行われている学校が荒れることはない」と言った道徳教科調査官もいます。毎週続けて行うことに意味があるのです。

いい授業をやろうと思うと、どうしても力が入り、疲れて続かなくなります。そんな大それたことを考えてはいけません。

道徳の授業は、そもそも個の心の在り方を問題とする時間です。集団全体の道徳的な価値観を高めることをねらいとしますが、それ以上に個々の

心を高めたい。したがって、この授業は、A君の考え方を明らかにし、より高い価値観をもつ他の子の意見をA君にぶつけて互いの考え方をどう思うかを話し合わせたりする中で、A君の考え方を少しでも良い方向に変えてやろうという戦略をもって行う指導。それが道徳の授業で行いたいことです。先生も子供と一緒に考えながら進める。これが大切です。

では、個々の心のあり方を高めるために、どのような指導をすればよいのか、シンプルに考えましょう。1時間の授業では、次の3つを、次の順番で行ってみてください。

1 道徳的価値そのものがどういうものを理解させる。

資料などをもとに、特定場面における主人公の行為や思考、判断、心情の良し悪しを話し合い、より望ましい判断や行為、考え方がどのようなものかを子供同士の話し合いを通じて、生徒自身が感じ取られるようにします。

2 道徳的価値を自分の生活とのかかわりの中でとらえさせる。

より高い道徳的な行為や判断がどのようなものかが1で明らかになったわけですから、その行為や判断が今までの自分の生活の中でできてきたかどうかを、資料からはなれたところで振り返らせます。

3 今後の生活で高い価値に基づいた行動を行うための自分の課題を自覚させる。

今後、より高い価値観に基づく行為や判断ができるようになるためには、自分自身の生活の中でどのようなことに気をつけたらよいのかという「自己課題」を各自の心に刻ませる。決して決意表明をさせる必要はありませんが、実践に向けた意欲を高める必要があります。

この3つを行う。これで1時間の道徳の授業が完成です。